

チーム石巻

立命館大学人間科学研究科教授 増田梨花

「チーム石巻」の活動は今回で7回目となりました。なんと今年は総勢16名（大学院生12名、民族音楽家、声優、ピアノ講師と増田）で石巻の地に降り立ちました。今年の「チーム石巻」のテーマはS（素直に sincere）T（本当に純粋な心で true）A（さまざまな状況をうけとめ acceptance）R（みんなでつながる relation）「STAR☆」にしました。

今回の石巻での活動はこれまで過去にも訪問したことのある知的障害・精神障害を持つ方々の施設と高齢者が入所するホームでした。私たちを待っていてくださった皆さんは民族音楽家のロビン・ロイドさんや院生のリピーターたちの顔を覚えており、とても和やかな雰囲気の中で「絵本の読み合わせと音楽のコラボレーションイベント」を行うことができました。院生の皆さんはギター伴奏や絵本の読み合わせ、そしてゲーム等それぞれの役割をムーズにこなしてくれました。

毎年この「チーム石巻」の訪問をコーディネートしてくださっているコーディネーターの阿部浩氏が、活動後に次のようなメッセージを送ってくださいました。

「立命館の学生たちの訪問は11月の恒例行事のようになりました。また、この活動は着実に被災地に根付き、地域と融合した活動として定着しました。被災地では沢山のお金が投じられてインフラ整備に費やされている中、障害を持つ方たちや高齢者の皆さんへの心のケアはお金では変えられない何かは今も必要です。そしてそれは温もりと暖かさであり立命館大学の取り組みに他なりません。どうかこれからもよろしく願いいたします。」

阿部氏の他にも、私の友人で声優の水谷ケイコ氏からのメッセージは次の通りです。

友人の梨花さんから「復興支援プロジェクト」に参加しないか？と声をかけて頂き、手を挙げてはや6年。多賀城市のプロジェクトも含めると今回の石巻で7回目の参加となりました。

今年は院生の参加がとても多いと梨花さんから聞いてはいたものの、12人とは思っても及びませんでした。昨年3人の4倍。果たしてどのような展開になるのか、

とても心配でした。また初日の夜の自己紹介では、声の小さいことと言ったらありませんでした。その後の「発声練習」では、声が前に出ないどころではありません。「きこえない…」当日は「マイク無し」と以前から聞いていたので、後ろの方に座っている方には聴こえづらくて集中してもらえないのでは……と凄く心配になってきました。とにかく「大きな声」を出して伝えることだけを意識してもらうよう、はっきり口を開けて話すことをお願いしました。

しかし翌日の「公演」は、私の不安をよそにみごとなものでした。どちらの施設でも声がよく通り、観客を飽きさせることがありませんでした。大きなアクションをつけて「役」に成りきる人が何人も出ました！「みんなの夢広場」では、「よかった！よかった！ また来てね！」と私たち一人一人に握手を求めてくる青年もいたほどです。「稲井デイサービスセンター」でも、最後まで利用者の皆さんが拍手で見送って下さいました。「ゲーム」といい、「絵本の読み合わせ」といい、観て下さっている方へみんなが一つになって、一生懸命に伝えようという姿が素晴らしかったです。みんなが皆、それぞれの役や役割になりきっていたから、観て下さっている方々の心を惹きつけたのでしょう。こんなにうれしいことはありませんでした。毎年毎年、グレードアップしているように思います。

石巻はようやく道路が整備され、大きなスーパーマーケットができて便利そうなのですが、お年寄りやからだの不自由な方々が利用できる身近なお店などがなくなってしまった…と伺いました。「また来てね」という、うれしい言葉に、これからも皆さんと一緒に寄り添っていきたいなあと改めて思うのでした。ボランティアがしたい！と思い参加させていただいた活動ですが、毎回、色々な意味で勉強をさせて頂いています。ありがとうございました。

最後に友人のピアノ講師の村田真弓氏からのメッセージは以下の通りです。

すすきやせいたかあわだちそうが秋空の下 空き地にたくさん生えていた 11月初旬の石巻 今回もたくさんの生徒さんと一緒に活動させていただきました。

学生さんの真剣な取り組みに エネルギーをさらに頂いた感じです！そして回を重ねている生徒さんの成長？ぶり。とても感心しました！来月の東京でのチャリティー

イベントにも 良い形で繋げていきたいと思います

ピアノ講師 村田真弓



最後に、大川小学校跡にコーディネーターの阿部浩さんご夫妻が私たちを連れて行ってくださった時に、お子さんを亡くされた遺族の方のお話をうかがう機会がありました。また、いただいた配布資料にはこのような文章がありました。

小さな命、小さな光

3・11以降にたくさん大切なことに気づきました。そして、それは3・11以前にも大切だったことに気づきました。失う前に気付くべきことだったのです。〔中略〕あ
のとき流された地域は夜になると街明かりがないので、月や星がきれいでした。小さいけれど、一生懸命輝こうとしている光があることを、ふだん私たちは気づいていない、最近そんなことを思います。命は光です。〔小さな命の意味を考える会の冊子より〕

この「チーム石巻」の活動はひとりひとりの温かな心が結集した活動です。自分のできる小さなことを大切にしようとする仲間、STAR 達の集まりです。来年もこのプロジェクトが復興地の希望を照らすささやかな STAR になれるよう祈りつつ・・・。

東日本家族応援プロジェクトに参加して

対人援助学領域 M1 浮田千紗子

今回、石巻だけでなく東北を訪れたのが初めてで、なかなか行くことができない場所なので非常に楽しみであった。プロジェクトの中でもなぜ石巻に参加したかという、私自身が親に絵本を読んでもらったり、家にたくさん絵本があった家庭ではなかったからである。さらに絵本を子どもに対してではなく、大人に対して読み聞かせをするとどのようなものが生まれるのか、絵本の力を体験したく参加させて頂いた。

絵本のイベントは高齢者施設と精神障害者施設の二か所で行った。絵本の読み聞かせを大勢の前でするのは初めてで、マイクなしで大きな声でセリフを言うのも滅多にしないことなので、イベントの前は不安が大きかった。しかし、本番を迎えると、他の院生は大きい声を出し、絵本の世界観に入って感情を込めてセリフを言っており、相乗効果のように、私も皆につられて絵本の世界に引っ張ってもらって、読むことができた。

また、音楽の力もとても大きく、限られた楽器の数で様々な音を生み出し、絵本の中の様子が頭に浮かんでくるイメージがしやすかった。読み手も音楽があることで雰囲気は掴めて、感情を込めやすかった。初めは絵本と音楽がどのようにコラボレーションするのか想像がつかなかったが、合わさることで何倍もの力が生まれることに気づいた。

フィールドワークとして、がんばろう！石巻、大川小学校、日和山公園など行った。7年経った今でも舗装されていない道があったり、建物が建っていなかったり、復興には相当な時間がかかるんだなと感じた。

がんばろう！石巻は、復興のシンボルとされている場所で、大きな木製看板や津波到達点ポール、3.11の被害状況が書かれたポスターがあり、津波被害の大きさを改めて感じた。災害が起こった時に、被害を少なくするにはどのようにしたら良いか、減災が大事であると学んだ。

大川小学校では、現場で娘さんを亡くされたご遺族の方に当時のことを話していただいた。ニュースで流れてくる情報と現場での状況が違うということをおっしゃっていて、自分の目で見なければ分からないものがあると思った。二度とこのようなことが起こらないように、災害が起きたときは「とにかく逃げてください。自分の身は自分で守る。」と私たちに伝えられた。そして、大川小学校や石巻など被災地と呼ばれる場所に外部の人が来ることに對して、震災があつてすぐに来て、何年後かに来て、何回訪れたかも関係ないことで、重要なのは現場に来て学び感じ、それを持って帰ることがだと話された。学んだことを伝え、実際に起こったときの教訓として留めなければならないと思った。

今回、プロジェクトでお世話になった皆様、そして増田先生、ありがとうございます

た。

東日本復興支援プロジェクト 2018～石巻～

M1 対人援助学領域 安田 尚人

東日本復興支援プロジェクトの対象の地域の一つである石巻へ行ったことは自分の中でとても大きく貴重な経験になった。最初は単純に「東北に行ってみたい」といったシンプルな理由だった。「今まで東北地方に行ったことがないから行って見たかった」というのもあるが、震災・復興の現状というものを自分の目で確かめたかったというのが大きい部分があった。テレビ・新聞の報道で津波の映像や写真を見ることは何度もあったが、「本当にそうなのか？」と言った疑問が自分の中に常にあった。そういった疑問を今回のプロジェクトを通して少しでも解消できたら、復興の現状を知れたらという思いをもちプロジェクトに参加した。

石巻プロジェクト内容は「絵本」と「音楽」の融合がテーマだった。面白そうではあるが最初は想像ができなかった。絵本を読む側と絵本のBGMを担当する楽器側と分かれるのだが、私は少しだけギターが弾けるということで楽器パートに回って絵本のBGMを担当した。実のことを言うと最初は見くびっていた。しかし、読み聞かす絵本に音楽が加わるとその絵本の世界が広がるように思えた。絵本は「小さな子どもが読むもの」というイメージが見事に崩れた。このプロジェクトを通して絵本の可能性を知ることができた。

石巻のフィールドワークはこのプロジェクトの中で最も印象深かった。津波が来た時に、避難場所になった日和山公園という場所に登った。日和山公園は石巻を一望できる場所だった。津波の被害を多く被り今でも復興が続いている石巻を一望できる日和山公園から見る石巻の景色は本当にきれいだった。

津波の被害を受けた大川小学校跡に訪問した際に津波で娘さんを亡くした方のお話を聞くことができた。話を聞き終えた後、自分には何ができるかということはずっと考えた。自分に何ができるのかと考えたときに、この震災を後世に伝えることではないかと考えた。実際に被災はしていない。被災された方々からお話を聞いてその内容を多くの人に伝え、震災を風化させないことだと思った。

今回の東日本復興支援プロジェクトは自分にとって多く考えさせられるプロジェクトだった。感じたこと、考えたこと全てを言語化するのはとても難しいと思う。それでも自分にできるかぎり石巻で学んだことを多くの人に伝えたいと思えた。そして、一回きりで終わらせたくない。できればまた東北に、石巻に行きたいと思った。

最後に、今回のプロジェクトは多くの人に支えられた上で学ばせてもらえました。このプロジェクトに携わった方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

チーム石巻に参加して

対人援助学領域 1 回生 饗庭桃子

石巻市を訪れるのは今回がはじめてであった。沿岸部の津波の被害を受けた地域や津波の際に避難して助かった山、復興のシンボルとなっている場所を訪れ、地元の名産である海鮮をいただいた。町全体は、破壊と創造が混在しているという印象であった。津波の被害で建物が流され更地になった場所は片づけられ、元からそういう土地であったかのように草が茂っていた。町の中はだいたい復興が進み、破壊を強く感じる場所はあまりなく、再建された新しい家々が立ち並んでいた。高い防波堤が作られ、道路にも盛り土をし、新しい街を創る。物質的な復興は着実に進んでいると感じた。しかしその一方で、そこに住んでいる方の思いに目を向けなければならないということも実感した。

震災直後に『がんばろう！石巻』という看板が設置され、今では震災の祈念公園となっている場所を訪れた。私たちが、がんばろう！石巻を訪れたのは防災の日であった。地元のコーディネーターの阿部さんのお話を聞き、見学をしていたとき、避難訓練の町内放送が響き渡った。そこにいた人たちのスマートフォンが一斉に鳴り出し突然のことに緊張感が走った。この場所から日和山と言う、避難した人が助かった山まで行くにはどれくらいかかるのか一瞬のうちに考えたが、具体的な方法は浮かばなかった。急なことに正しい判断をするのはとても難しいと実感した。今まで避難訓練に身を入れて行ったことはなかったが、近くでは高い建物に避難している人もおりとてもリアルな体験であった。自分の判断が自分の命を守るのだと強く思った。コーディネーターの阿部さんがおっしゃった「明日は我が身」という言葉がより深く感じられた。

町としての震災、個にとっての震災と様々な立場から見た震災の一部を感じることができた。3日間のプログラムは享受することばかりであった。日常の生活に戻ってきた今、私にできることはほとんどない。コーディネーターの阿部さんは、この経験を「就活などで語るような“ボランティア活動”ではなく、この地域に来て地域の人と交流し話したこと体験したことを、今後の人生に活かせるようにしてほしい」と言ってくくださった。私は、このプロジェクトで初めて東日本大震災と向き合うことができた。だが、「証人」となるにはあまりにも責任が重く、語る権利はない。学んだことがいつか何かに活かせるように、自分の経験にしっかり蓄えておきたい。

最後にこのプロジェクトのコーディネートをしてくださった阿部さんご夫妻、増田先生、地域の方に感謝を伝えたい。ありがとうございました。

今回のプロジェクトに参加を決めたのは、絵本と音楽というキーワードにとっても興味を引かれたからである。幼少期より母親が絵本好きということもあり、家にはたくさんの絵本があった。私自身は読み聞かせの記憶はあまりないが絵本が好きでよく読んでいた。また、父親も母親も楽器を演奏することができ、小さいころより慣れ親しんだものであり、今自分自身も芸術・表現に携わっていることもあり、どちらも自分にとってとても馴染み深いものでもあることからこのプロジェクトへの参加を決めた。

絵本を読み聞かせることの良さだったり、子供だけでなく大人に絵本を読み聞かせをすることもいい働きをするのは想像ができるが、音楽と掛け合わせることでどういう効果が出るのかは想像が難しかった。そのため、実際に反応を自分の目で確かめられることがとても楽しみだった。まず絵本と音楽のコラボレーションのイベントを行ったときに読み手側の変化に驚いた。自分は普段あまり声を通らず聞き返されることも多いくらいの音量のため大勢の前でマイクもなしに聞いている人に届けられるのか不安だった。しかし、いざ聞き手の前で自分のセリフを読んでみると、思っていたよりも大きい声が自然と出たことにとっても驚いた。また、ほかの読み手の方々も回を追うごとに役へのなりきりや身振り手振り、声の大きさ、表情などに変化が見られた。絵本には聞き手だけでなく読み手にも効果があるということがわかった。それから絵本を読んでいる場面に合わせた音楽をつけることにより、臨場感が生まれ聞き手を絵本の世界へ集中させたり、興味を薄れにくくその絵本へひきつける効果があったりするというのも面白いと思った。音楽でその場面の雰囲気を作るだけでなく、楽器によってはその絵本に出てくる文字の効果音を楽器で表現することもでき、聞き手はより一層絵本の世界へ入り込めたのではないだろうか。二つのものを組み合わせることの効果・面白さを味わうことができた貴重な体験であった。

現地のフィールドワークで訪れた「日和山」「石ノ森萬画館」「がんばろう石巻」「大川小学校」などでは震災についてとても考えさせられる貴重な体験であった。

当時ニュースで取り上げられていた情報がいかに少なく一部分だけを報道していたかということがわかった。隠された情報や報道されていないことは現地に行かなければ、自分から見ようとしなければ知ることができないということを実感した。自分は住んでいる土地柄としてほとんど災害にあわずに生きてきて、自分は大丈夫とかここなら災害があっても大丈夫だろう、と軽く考えているところがあった。しかし今回現地の方にお話を伺って、自分の勝手な判断がいかに危険であるかを知った。警報により一度非難したが津波が来なかったため家に戻っていった方がいたり、逃げる時間があったのに判断ができず大勢の方が亡くなったりと、災害が起きたときの一瞬の判断がいかに大事で大変なものであるかがわ

かった。

お話をうかがった中で印象に残っているのは「災害を防ぐということは不可能で、私たちができることは逃げることだけ」という言葉である。この言葉や実際に災害にあわれたお話を聞いて自分ができることはあるのかを考えさせられた。そうして考えたが自分にできることなんてほとんどなく、聞いた話を伝えることしか自分にできることはないのではないかと思った。大川小学校での語り部さんが「ほかの地域でもこのような事故を二度と起こらせたくない」とおっしゃっていてそのために活動を始めたという風に伺った。この方から伺った話を私たちが伝えていくことで少しでも似たような被害を防ぐ手助けになればと思った。

こうしてプロジェクトに参加して災害の恐ろしさ、そこにいらっしゃる方々の強さを実際に感じる事ができたことは本当に貴重な体験でした。また東北、石巻へ来たいと思いました。

お世話になった現地の方々、先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

東日本家族応援プロジェクト 2018 石巻コース

対人援助学領域 M1 松下彩花

私がこの実習で学んだことは、大きく3つある。

1つ目は、絵本と音楽が持つ力についてである。石巻コースでは、2つの施設に絵本と音楽のコラボレーションの出し物を行った。絵本のストーリーに音楽を付けることで、絵本の世界が臨場感たっぷりに伝わることを知った。また、大人数で台詞を分けて読むことで、劇のような仕上がりになった。台詞を読む院生は、練習を何度かするうちに、声もどんどん大きくなり、身体を動かして表現するようになり、感情を込めて読むことができるようになった。全員が真剣になり、その場が1つになった。絵本と音楽を組み合わせたことで、絵本のストーリーを新しい形で見ただけなこと、私たちがそのような姿勢で取り組んだことで、見てくださった方も絵本の世界に引き込まれたのだと思う。聴いてくださった2つの施設の方々も、行った私たちも、楽しくお互いに元気になれた。この体験から、絵本と音楽のコラボレーションの力、可能性を体感し、学ぶことができた。

2つ目は、フィールドワークと現地の方のお話から、人も町も前を向いて進んでいることである。フィールドワークでは、様々な場所に残された地震と津波の爪痕を見せていただいた。残された爪痕、印からは、様々な町の想いが込められているように感じた。3.11から7年以上が過ぎている今、町は物理的に復興しているのだと思う。しかし、新しい街に住む人々の心はこの現実についてきているのだろうか。現地でお話をしてくださった方は、3.11のときその場がどんな様子であったか、今後どうすればいいのか、について教えてください。

た。「防災」よりも「減災」という考え方で災害に向き合うべき、対策すべきであるとおっしゃっていた。自然の恩恵を受けていながらも、それを忘れてしまいがちである。自然が持つ力を人が止める、防ぐことは不可能に近い。だから、できることは「減災」であると、私たちに教えてくださった。被災されて失ったものも多いのにも関わらず、東日本大震災の経験を次に繋げることを誰もが考えていらっしやう。人も町も前向きで、あったことをみんな受け止め、しっかりと前に進んでいる様子が窺えた。

3つ目は、人から聞いたこと、テレビで見たこと、新聞で見たことは、薄っぺらい情報でしかないこと、本当かどうか分からないものであるということである。フィールドワークで最も印象に残った場所は、大川小学校であった。メディアの情報でしか、大川小学校のことを聞いたことはなかった。その場を実際に見た私はその場で何があったのかを、お話を聞きながら想像してしまった。その場に行って、自分の目で見て、肌で感じることで、そこから考えることがいかに重要であるか、ということに気づかされた。

私はここにまとめたように、短い時間ではあったが、石巻で多くのことを学んだ。ここがスタートである。この体験だけで「証人」にはなれない。ここから、石巻について、自然災害について学び続けること、知ろうとし続けること、このプロジェクトを後輩にもつないでいくことで、「証人」に近づいていくのではないだろうか。

このプロジェクトに関わってくださった方、お世話になった方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「東日本家族応援プロジェクト in 石巻 2018」に参加して

臨床心理学領域 M1 中島 佑里子

阪神淡路大震災後の大阪に生まれ、大きな地震を経験してこなかった私にとって、東日本大震災はどこか「遠い場所での出来事」という感覚があり、今まで積極的に関わろうと思ったことはなかった。しかし、今年の6月に地元を襲った大阪北部地震を経験し、震災と向き合う必要があると痛感した。このような経緯から、私は今回のプロジェクトに参加し、初めて石巻を訪れることになった。

現地では様々フィールドワークを実施したが、その中でも特に印象に残った「絵本と音楽のコラボレーション」および大川小学校の訪問について述べたいと思う。

「絵本と音楽のコラボレーション」は、ギターやアフリカの民族楽器の演奏に合わせて複数人で絵本の朗読をするというイベントで、2日目の午前と午後に計2か所の施設で実施された。そのときに、私は絵本に登場するリスとカケスの役として朗読に挑戦した。施設利

ユーザーの多くの方が、最初はそわそわした様子を見せていたが、次第に物語に集中し、場面展開の際には声を上げて笑ってくれるようになった。最終的には握手を求められたり、施設を後にする際に多くの方から「ありがとう」と声を掛けていただいたりしたため、拙いながらも全力で取り組んだ絵本の朗読は、確かに聴き手の胸に響いたのだと実感することができた。

イベントを終え、最後のフィールドワークとして訪れたのが大川小学校であった。この小学校には地震発生から約50分後に津波が押し寄せ、校庭で長時間待機していた大勢の児童及び教員が流された。しかもそれは、校庭のすぐそばにある裏山ではなく、川に近づく方向に児童・教員が避難を開始した直後であったという。実際に目にした裏山の斜面は本当に緩やかで、幼い子どもであっても容易に登っていく様子が想像された。そしてそれが、かえって事故の悲惨さを物語るようでもあった。また、小学校の校庭ではボランティアの方から震災発生直後の話をうかがうことができた。大川小学校の周辺は地震が発生した後繰り返し津波に襲われ、1度目の津波の後に山から降りて犠牲になった人々もいたという。「震災直後の対策というのは逃げることを以上のことは何もない。変な好奇心は捨てて絶対逃げるという行動を取ってほしい。」という言葉が強く印象に残った。

私は今回のプロジェクトで石巻を訪れ、その地を踏み、空気を吸い、景色を見た。そして、そこで暮らす人々から津波がきたあの日の話を聞いた。震災はもはや私にとって「遠い場所での出来事」ではなくなった。私はこれらも石巻に目を向け、その場所でこれから生まれてゆくものに関わり続けたいと思う。

東日本家族応援プロジェクト

人間科学研究科 対人援助学領域 M1 石川晋太郎

チーム石巻は、「素直に、本物を見て、様々な状況を受け止め、みんなでつながる」をテーマに掲げ、活動を行った。私が、特に印象に残ったことを2つ挙げたい。

一つ目は、「絵本と民族音楽のコラボレーション ライブイベント」を石巻市内の2つの施設で行なったことである。前日に、増田先生の友人の水谷さんより発声の練習を院生皆で行った。私は、元々緊張しやすく、声が小さいのもあり、私の中では声を出しているつもりなのであるが、「その音量の声では後ろの席の人まで声が届かないよ。」とアドバイスを頂いた。その練習のときは、明日、施設のスタッフの方もお忙しい中私たちのイベントの為に時間を作ってくださっているのに、自分に出来るのかと不安になりながらイベント当日を迎えた。当日は、私も気持ちを切り替えて自分という枠を外して勇気を出して一歩踏み出してみようという気持ちでやらせていただいた。結果は、院生皆が、お腹から声が出ておりま

のあるものが出来たのではないかと感じた。それは、聞いて下さっていた反応からもうかがうことが出来たのではないかと感じた。精神障害者の施設では、イベントを行った後、一人一人に握手をしてくださる利用者の方やハイタッチをして下さる利用者の方、絵本の読みあわせ中も真剣に私たちの話に耳を傾けてくださっており終わったら拍手をして下さっていた。高齢者の施設でも、お昼寝の後の時間であったが、皆さん目を開いて私たちのイベントを聞いてくださり参加して下さっていた。絵本の読みあわせを行って感じたことは、私は精神科の病院で看護助手の仕事をしている時に作業療法室に患者様を誘導する際に、誘導する際はすごく嫌がっていた方が作業療法が終わる時間に迎えに行かせていただくと笑顔であったり、作業療法に行かれる前より行かれた後のほうが顔の血色が良くなっていたなあとということを思い出し今回の利用者の方や高齢者の方の反応から少し私たちのイベントが心に届いていたのではないかなと感じた。

二つ目は、大川小学校のフィールドワークであった。石巻中央ライオンズクラブLCIFコーディネーターの阿部浩氏の話や大川小学校で娘を亡くされた父親の方のお話の中で印象的だったのが、ここは被災ではなく事故の現場であるという言葉であった。それはなぜなのか、地震発生から津波到達まで50分間の時間があったにもかかわらず、最高責任者の校長不在下での判断指揮系統が不明確なまま、すぐに避難行動をせず校庭に児童を座らせて点呼を取る、避難先についてその場で議論を始めるなど学校側の対応を疑問視する声が相次いだからである。校庭のすぐそばには裏山を登るための緩やかな傾斜が存在し、児童らにとってシイタケ栽培の学習でなじみ深い場所である裏山は有力な避難場所であったが、教職員の間では、裏山へ逃げるといった意見と、校庭にとどまり続けるという意見が対立した。もしこの裏山に全員が避難出来ていれば助かった命が大勢いたのではないかとということであった。ご遺族の方が、最後に言っておられたのはこういう震災があったときにまず考えて欲しいのは安全な場所に逃げることに。興味本位で危ない場所のほうに行ってその光景を見たくなくなるという心情になる場合もあるが、そうではなく逃げることに。というのを真剣に私たちに語って下さっていた。このご遺族の方は、決して自分の娘を亡くしたと言うことの傷は癒えることはないであろうに、人の為、この大川小学校を訪れる人に生きる大事さを訴えて下さっている生きる証人であるなど感じたからである。

東日本・家族応援プロジェクト 石巻 2018 に参加して

人間科学研究科 対人援助学領域 M1 池田香弥乃

音楽と絵本がコラボレーションするとどうなるのか。それがどの様に成人の利用者の方のいる各施設の中で役割を果たすのか。「トータルサポートセンター みんなの夢広場」様で演じるまでは全く予想のできない状態であった。しかし、実際に参加して配役を演じながら、自分の目の前でそれを観覧して下さっていた方々を拝見してみると、イベントが始まる前

とはみなさんの表情が変わり、真剣に私たちを見てくれたり笑顔のをぞかせたりと、人々の姿は優しいものであり温かさが伝わってきた。絵本を読み合わせるということだけではここまでの気持ちを引き出すことは難しかったであろう、きっと物語を引き立てる音響効果やナレーションがあつてのものであると感じた。知的クールでスポーツマンの印象が強かった友人が、ギターを器用に操り弾き語り、音楽的な才能があつたとはと驚かされもした。私達だけではここまでの盛り上がりを作ることは難しく、そこに一緒に私たちの力になって下さった、教授初め音楽療法士の先生や声優の先生、ピアノの講師のご指導と実演があつてのことであると実感した。今回、これら施設の方々の楽しみ生き生きとした表情から、笑顔になっていただくということも支援活動の一つであると実感した。また、演じる自分にとってもいい刺激となり有意義な時間であつたといえる。加えて、石巻プロジェクトのメンバー一人一人の個性的な面を知ることが出来、新しい発見もできた。コラボイベントでは多くのメンバーで取り組めたため、迫力や臨場感を増すことにつながり、まさにこのようなことが協働であるのかなと、支援活動を通して学べた。私達の出番の後は、音楽療法士の先生の出番である。豆や木の実、竹、山羊の爪、牛の骨、角のオカリナなど、様々な物から作られた楽器で、初めて見るようなものも多く、そのうちいくつかを一人で操りながら演奏していらっしやう。利用者の方も、音楽療法士の先生の足に括り付けた鈴を踏み鳴らす度に反応なさって、最後には笑みまで見せられていて、ホール中の人を巻き込んでショーにされていた。プロはやはりすごいなと感じた。イベントでは、会場をセッティングして下さった各施設の職員の方々、私達を施設まで送迎して下さったコーディネーターの方のご尽力もあつた。多くの方々のお力添えがあり、このコラボイベントを無事終了することができたといえる。感謝の気持ちでいっぱいになった。午後からは、「石巻稲井デイサービスセンター」様でも同様のイベントを行った。利用者の皆さんが集中してご覧くださっていて、時々見られる笑顔に音楽と絵本とコラボレーションの醍醐味のように感じた。音楽療法士の先生の出番では、「紅葉」や「荒城の月」など高齢者にとっても馴染みやすい選曲をされていて、皆さん思い思いに声を出して合唱されていて、中には手拍子をなさっている方もいて、相手の立場に立って準備する大切さを学んだ。

「特製 とようら味処 焼そば」様での昼食では、お店には少し人数が多すぎたため、ご自宅を開放して下さって全員座って食べる事ができた。「石巻焼きそば」は、大阪の焼きそばと違い、そばと具が別々のものであつた。そばの上中央に目玉焼きが載せられ、その上に海苔や紅ショウガ、豚肉、キャベツが載せられ、キャベツの上には人参とピーマンが並べられ、実に彩が美しかった。添付されていたソースを「後がけ」するのが石巻流とのことで、目玉焼きの半熟の黄身や具を絡めて食するととても美味であつた。

大川小学校の見学では、渡り廊下がねじ曲がって傾いて外れていて、阪神大震災の際の高速度道路の被害にあまりにも類似していた。大川小学校は津波で、阪神大震災は地震での崩壊という違いはあるが、自然災害の怖さを実感した。その後「大川伝承の会」の方のお話をお伺いした。娘さんを亡くされたご自身からお話が聞けて、報道で見ていた時とはイメージが

違うことが多かった。山は子どもの足でもすぐに歩けたなだらかな道で校庭よりほんの3分4分の距離であり、しいたけ栽培で慣れている場所であったことを聞き、無念な気持ちとなった。そもそも大川小学校は宮城県の津波ハザードマップの予想浸水域外となっており、津波災害時の指定避難所であったという。様々な要因のもと、尊い命が奪われたことに心が痛んだ。とっさの事があったときに自分は果たしてきちんと適切な判断ができるのであろうか、対応の難しさをひしひしと感じた。

私は今現在クリニックに看護師として勤務しており、様々な方と接する機会も多いが、医学的な治療を主としていたため、今回、絵本や音楽療法を用いて精神的なケアに努めることで、なんらかの好影響をもたらすことができ、今後大変参考になった。これからの現場にも活かしていけたらと感じた。現地で知り得たことは、遥かに自分の想像を超えた被災地の現状であり、7年経った今でも多く課題は残されていることを痛感した。にもかかわらず、多くの被災者の方々は必死にレジリエンスを高め、完全復興を目指し日々努力されている姿に深く頭が下がった。そして地元を愛し絆を分かち合う姿はまさに偉大であり、今回のプロジェクトで関わることが出来て、立命館大学院での支援活動に参加させて頂けたことに感謝の気持ちを持った。今後の石巻市の復興と発展を祈り、今回の支援活動以上に更に尽力できる自分でありたいと強く思った。

最後に、「トータルサポートセンター みんなの夢広場」の皆様、「石巻稲井デイサービスセンター」の皆様、「特製 とようら味処 焼そば」様、大川小学校で語って下さった「大川伝承の会」の方、コーディネーターを務めて下さったご夫婦および石巻の皆様、また、引率下さった教授、音楽療法士の先生、声優の先生、音楽の講師の皆様、そして、ともに同行出来た先輩方と学友の皆様へ、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

「東日本・家族応援プロジェクト in 石巻 2018」に参加して

対人援助学領域 M1 植野知佳

石巻での実習を控え、事前に震災時の石巻の様子や大川小学校での出来事について学んだものの、実際に現地を訪れて見た今の石巻の復興の様子、大川小学校の姿を目の当たりにしたら、文字で追った過去とは全く受ける印象が違うことに気付かされた。車窓からは工事中の道路が見えた。「新たに防波堤と緊急避難のための道路を作っている」とは、現地のコーディネーターの方に伺った言葉である。関西で暮らしては見えない今の石巻であり、そこで暮らす人々にとって震災は決して過去のことでなく、現在も共存して教訓としていかなければならないことなのだと痛感した。

震災被害を受けた場所を巡り、語り部として活動していることを話して下さったタクシーの運転手、コーディネーターとして『がんばろう石巻、日和山公園、大川小学校』等案

内し、当時のことを話してくださった阿部さん、大川小学校で震災当時の出来事を話してくださったご家族の方、今回沢山の方々に語り部としてお話を聞かせていただいた。3.11以降多くのを失い、変化を余儀なくされた方が大勢いらっしやっただと思う。石巻で出会った方々も、その一人である。決して楽しいものではない体験を話すことを選び、聞かせていただいたことに感謝し、私自身この体験を人に伝え、共有し過去のことにならないよう取り組んでいきたいと思う。

「東日本・家族応援プロジェクト in 石巻 2018」に参加して

応用人間科学研究科対人援助学領域 M2 坂本幸一

昨年に続き、今年もプロジェクトへ参加させていただいた。そして再び石巻を訪れることができた。その中で「絵本は人と人を繋ぐ架け橋」であることの再認識、そして「一度行った場所にもう一度訪れる」という意義を改めて感じる事ができた。まずは絵本と音楽のコラボレーションイベントから記していきたい。

今回も昨年に続き、障がいをお持ちの方々が生活されている施設、高齢者の方々が生活されている施設を訪問させていただき、絵本と音楽のコラボレーションイベントを行った。そこでは素晴らしい瞬間を目の当たりにすることができた。利用者様が着席されイベントがスタートし、絵本を読み始める。しかし、絵本に興味を示し見聞きしている方がおられる一方、横を向きあまり興味がなさそうにしておられる方、立って後ろを向いておられる方など様々な状況でスタートした。私は心の中で「みんなでしっかり練習もしたし、利用者様全員がもっとしっかり聞いていただけたら嬉しいな」と未熟にも感じてしまっていた。しかしその数分後、驚く光景があった。誰も強制していないにもかかわらず利用者の方々ほぼ全員、絵本が映し出されているスクリーンに向き始められたのである。また、不思議と皆様同じ表情をされている様にも見えた。その瞬間、「ああ、これが絵本がもたらす一体感なんだ」と強く感じた瞬間だった。同時に、利用者の方々の表面的な姿だけで主観的に状況を判断してしまった自分の未熟さを感じ、また、サービスマンという前提にも関わらず「しっかり聞いてほしい」という自己中心的な概念を持ってしまったことへの未熟さも痛感した。前を向いているから聞いているわけではない。横を向いているから聞いていないわけでも決してない。「その空間」「その場」にいる限り、絵本は人の心に入っている。確実に入っているのだと・・・それぞれ散らばっていた心が、まるで「11ぴきのねこ」のようにみんなで絵本という”いかだ”に乗り、ゆっくりと進んでいく。そんな光景に思えた大変貴重な瞬間だった。「絵本は人と人を繋ぐ架け橋」であることを再認識できた。

続いて「一度行った場所にもう一度訪れる」という意義について記していきたい。

昨年に続き今年も参加させていただく中で、現地コーディネーターの阿部さんが「同じ場所に行くことで得るものがある」とおっしゃっていた。その理由を自分の中で終始考えていた。同じ場所へ行く意義は多数あると思う。その中でも過去との比較ができたり、変化に気づけたりすること、点ではなく線で繋がりを感じられるということは非常に大きな意義であると個人的に感じている。例えば福祉施設でのイベントを振り返っても、上記の貴重な体験をはじめ、スタッフや利用者様が歓迎して下さる中でいただいた「今年も」や「来年も」という言葉の実感や、昨年お会いしたことがある利用者様との再会などたくさん意義を感じられた。

昨年、自分の中で「証人」とは何かを考えてきた。そして「現地での現実をそれぞれのフィールドで自分の言葉をもって語ると同時に、現地へ行ってこそわかることがあるという事実を、聞き手に強制することなく自発的に思ってもらえるような語りができる人」と自分の中で定義した。そして今後も証人として語り続けていく中で、わずか2度の訪問ではあるが1度目では強く感じられなかった現地での「プロジェクトとしての繋がり」を今回は感じられた。その経験が、今後の証人としての語りにほんの少しでも変化や深みをもたらしてくれると感じている。

しばしば会話の中で「それはもう食べたからいいや」「そこはもう行ったから他行こう」「この地域は〇〇が代表だから〇〇だけ見ておけばいい」などの言葉を耳にする。私も同じように考えていたことがあった。しかし、今はすべてその逆であると考えように変わった。人の心は絶えず変化している。例えば昔の曲を聴き、その歌詞の意味を以前とは違う新たな理解で感じ取れた経験、昔読んだ絵本を読み返した際に印象が変わっていて驚いた経験など後を絶たない。よって、同じ場所に再び訪れることの大切さ、むしろ知っている場所だからこそもう一度行く必要があるということ。そこで起きる大小様々な変化に目を向けられる。また、変化しないものがあるならなぜ変化しないのかを考える心、そしてそのひとつひとつの事象に気がついた自分自身の心の変化（成長）を知る。サービスマーケティングを通して理論と現場を相互環流をしていく中で、点ではなく線で考えられること、「変わるもの」「変わらないもの」を見つめ考えていくことの意義を改めて知り得たことは、今回の訪問で最も大きな知見であると感じている。

最後になりますがプロジェクト代表の村本先生、今年も参加させていただきましてありがとうございました。そして私たち院生の身体面、精神面での安全を常に考慮して下さりご引率して下さった増田先生、現地で私たちをあたたかく迎え入れて下さり時間の許す限り行くべき場所に連れて行って下さった「おしかの学校」の阿部様ご夫妻に心より感謝致しております。

そしてこのプロジェクトに関係して下さったすべての方々に心より感謝致しております。本当にありがとうございました。

3 回目の参加に寄せて

応用人間科学研究科 対人援助学領域修了生 平井一成

私は一昨年、昨年に続き、今年も石巻プロジェクトに参加した。2018年3月に大学院修士課程を修了していたが、再び参加したいという気持ちもあり、研修生となった今年も参加を決めた。

今年は昨年とは違い、20人近い人数で行われる石巻プロジェクトとなった。毎年石巻で行っている絵本と音楽のコラボレーションではあるが、今年は演じる人数が増えたこともあり、非常に賑やかなものとなった。

1日目、東北に移動した後、参加したメンバーで読み合わせの練習を行った。自分は修士として、また3回目の参加ということもありあまり緊張はしていなかったが、やはり初めての参加になる方々は緊張しているのか、戸惑っているのか、どこか硬く、ぎこちない雰囲気であった。しかし、翌日本番を迎えると、練習とはうって変わって大きな声で、伸び伸びと絵本を読む姿がそこにあった。絵本と音楽のコラボレーションは観客側に留まらず、演じる側も変えていく素晴らしい活動の1つであると、改めて実感した。

現地ではイベントを開催するだけでなく、フィールドワークも行った。実際に被災した場所を訪れ、何があったのかを知る。そして今、どうなっているのかを知る。「証人になる」という事が、このプロジェクトの1つの目的でもある。

仙台から石巻を繋ぐ JR 仙石線の石巻駅は素敵な駅である。宮城県出身の漫画家で、「仮面ライダー」に代表されるヒット作を生み出した石ノ森章太郎氏が生み出したキャラクター達に彩られた駅舎があり、バスのロータリーがあり、そして駅の前には賑やかな商店街がある。しかし、あの日。2011年3月11日、この駅舎まで津波が押し寄せた。駅には今でも津波到達地点を示す掲示があり、すっかり綺麗になった駅舎の中でそこだけが静かに震災を語っている。

2日目に訪れた日和山は、多くの住民の方々が津波から逃げるために駆け上がった山である。頂上付近には石でできた鳥居があり、そこから石巻の海岸沿いを一望することができる。海岸沿いには新しくできた集合住宅や工場、工事中の道路などが見えるものの、かつてそこにあったであろう町は無く、ただただ広い土地と工場、倉庫などがあるという様子であった。私達が日和山を訪れたのは夕方であったため、とても綺麗な夕焼けを見る事ができた。そして眼前には、あの日牙をむいたとは考えられないほど穏やかな海が広がっていた。また別の方角に目を向ければ、川の中州に立つ「石ノ森萬画館」を眺めることができる。萬画館も震

災と津波で大きな被害を被ったが、多くの人々の尽力によって2012年11月17日にリニューアルオープンすることができたという。日和山を訪れたのち、時間に少し余裕があったため萬画館を訪れる事ができた。その日は「マンガの日」ということらしく、館内ではイベントが開催されていた。

最終日である3日目には、ニュースなどで有名になった「がんばろう石巻」の看板を訪れた。看板の周囲にはかつて町であったであろう痕跡が残されていた。歩道の縁石であったであろうもの、街灯だったのか信号機だったのか、津波で押し切られ内部の配線が露出している金属製のパイプ、黒く変色してバラバラになっている点字ブロックなど、生々しさを感じさせるものが僅かではあるが周囲に残っている。人の背丈を大きく超える津波に襲われ、更地になってしまったこの場所にも、確かに町があって人々が暮らしていたのだと実感させられる。ちなみに、この日はちょうど「津波防災の日」で避難訓練が行われていたらしく、私達が持っている携帯電話が、「がんばろう石巻」の看板の前で訓練として大津波警報の通知を鳴らした。そして次のフィールドワーク場所への移動中、ビルの上に避難している方々を見かけた。震災の事を忘れない、自分たちの身を守る努力を、という姿を垣間見ることができた一瞬だった。

その後は各地を見て回りつつ、最後に大川小学校を訪れた。ここは74人の児童の他、教職員や避難してきた住民の方々が津波に吞まれて亡くなっており、学校側の対応などについて様々な議論がされたことは記憶に新しい。昨年訪れた時に比べると、やはり建物の風化が進んでいるようにも思えた。校舎は震災遺構として保存されることが決定しているが、日々風化が進む校舎をどう保存していくのか、今後の対応が気になる場所である。

既に3回訪れた場所ではあるが、やはりこの場所に立つと何か感じるものがある。今年は偶然、実際に大川小学校でお子さんを亡くした方のお話を聞くことができた。そのお話を聞いて、伝承していくことの大切さを改めて実感したのは勿論の事、もうひとつ気づいたことがある。メディアでは「大川小学校で児童74人が亡くなりました」という報道がされる。それは客観的な事実として間違いではないし、それを聞いた自分たちは「ああ、74人も亡くなってしまったのか……」と思う事がよくある。しかし、そこにあったのは1/74ではなく74/74、すなわち1である。報道では犠牲者の1人、遺族の1人としてしか紹介されないが、そこには74の人生があった。家族があった。随分前に、ビートたけし氏が震災について「1人が死んだ事件が2万件あった」と語ったという記事を読んだことがある。印象深い言葉ではあったが、その記事を読んだときは、なるほどこういう考え方もあるのか、程度にしか思わなかった。しかし、3度石巻を訪れてやっと74/74=1であることに気づき、やっとあの時読んだビートたけし氏の言葉を理解できたように思える。

3度目の参加となった今回の石巻プロジェクトは、私にとって例年以上に濃い体験となった。それは3回目というある種の「慣れ」が生み出したものであるのかもしれない。慣れというのはあまりいい表現とは言えないかもしれないが、何かを考える余裕、細かい部分まで目を配ることができる余裕が生まれたということでもありと私は考えている。そして「証人」

であり続けるために必要なことは何か。継続することであると私は考えている。毎年同じ時期に、同じ場所を訪れ、以前訪れた時との変化を感じ、記録していく。だから私は、許される限りこのプロジェクトに参加し続けたいと思う。

最後に、現地でお世話になった方々に感謝の意を表すと共に、震災で亡くなられた全ての方に、謹んで哀悼の意を表したい。

「東日本家族応援プロジェクト 2018」に参加して～石巻で「絵本と音楽」で、私たちの願いを語る

人間科学研究科博士後期課程 鈴木美枝子

3年前、福島県に仕事の関係で転居しました。転居したときには、街はすでに復興をしており、日常が戻っていました。しかし、生活し始めて半年の時間が経過した頃、震災で親族を失ったこと、原発事故の影響により仮設住宅で生活をしていることなどの話を聞くようになりました。その頃から、私は「東日本大震災は終わっていないんだ」ということを強く感じるようになり、南相馬に足を運んだり、東日本大震災当時のお話を伺ったりするようになりました。そんなとき、本プロジェクトの存在を知り、福島県以外の状況についても学びたいと思い、参加をさせていただきました。そこで体験した「絵本と音楽のコラボレーション」について、今回は感想を述べたいと思います。

石巻チームでは、石巻市内にある2か所の施設を訪問するにあたり、「絵本と音楽のコラボレーション」による出し物に取り組みました。私は、仕事の関係で、前日の練習から参加しました。私が参加したのは「11匹のねこ」という絵本の読み聞かせでした。アフリカの民族楽器の演奏に合わせて、複数的人数で読み聞かせを行うというものでした。

前日の夜、私は初めて一緒に参加するメンバーと顔を合わせ、「絵本と音楽のコラボレーション」の読み聞かせの練習をしました。発声練習の後、読み聞かせの練習が始まりました。初めて合わせる「11匹のねこ」の読み聞かせでしたが、絵本と音楽とのコラボレーションによって、私たちの「11匹のねこ」の世界を作り上げていくことができました。それは、音楽がもつ「リズム」と絵本のもつ「メロディ」とがコラボレーションされ「ハーモニー」という世界をつくることによってできたのではないかと思っています。

一人ひとりの読み手の呼吸に合わせて、音楽を担当してくださったロビンさんが、音楽を奏でてください、その奏でたリズムに一人ひとりの読み手の呼吸が同調し、心が一体となりました。そこに「11匹のねこ」のストーリーと、読み手一人ひとりの個性が重なって「ハーモニー」となり、私たちの「11匹のねこ」のメロディが生まれ、新しい世界ができたように思いました。

私たちは、私たちの「11匹のねこ」などの絵本の読み聞かせをもって、2か所の施設を

訪問しました。そこで、一生懸命に「絵本と音楽のコラボレーション」によって、私たちの願いを「11匹のねこ」というメロディで語りました。施設の利用者のみなさん一人ひとりのまなざしが私たちの語りを支えてくださり、私たちの語りが利用者の方のみなさん一人ひとりの心に響き、私たちの思いと利用者の方のみなさんの心とが『つながった』という実感を持つことができました。「ありがとう！」の言葉が自然に交わされた瞬間は、まさに『ひとりじゃない、みんなつながっている』と全員が実感した瞬間でもあったように思います。

本プロジェクトに参加し、『つながる』ことの喜びを実感し、それが『共に生きる』ということにつながる大きな一歩であることを確認しました。

